

琉球大学学術リポジトリ

高校生の意志型・願望型の意味ある他者と進路発達に関する研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 恒男, Shimabukuro, Tsuneo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1930

高校生の意志型・願望型の意味ある他者と進路発達に関する研究

島袋恒男*

A study on career development and significant others between two goals orientation
types of senior high school students

Shimabukuro tsuneo*

<研究目的>

「目的を持ち努力する高校生」を指す意志型の高校生は、高学歴の要求される具体的な専門職を将来の職業として希望していることが示された(島袋ら, 1998)。そして、その職業の選択理由としての「労働価値観」は仕事の外面性を重視する安定志向ではなく、「仕事のやり方」や「仕事の性質」を重視していることが示された。つまり、意志型の高校生は目的意識が具体的に形成されており、それに即して希望する職業そのものの認識・理解も深く発達していることがうかがえた。

では、そのような意志型の高校生の目標志向性や職業的発達は何に由来しているのだろうか。本研究ではそれを明らかにすることを大きな検討事項にしている。

この目標志向性の発達に関して中川(1982)は、「小学生の目的意識を育てる条件」として、2つの結論を得ている。ひとつは、親子間での子どもの将来に関する会話・対話の存在であり、そのような対人的相互作用の中で、子どもが自分の将来を意識し、目的意識が育つと指摘している。もうひとつは、それが可能になるためには、子どもが仲間・同輩の言動に感動できることが必要であると指摘している。他者の望ましいと思える言動に自分から積極的な感情を形成するという体験を基にして、子どもが親子間で自分の将来のあり方に積極的な感情を付与することができ、それが目的意識や時間展望という心理学的特性を発達さ

せることにつながると考えることができる。もちろん、その相手は親だけに限定されるものではないことは常識的にも頷けることである。このような指摘は、子どもの社会化の過程に「意味ある他者」が大きく関与していることを示しており、「意味ある他者」の存在は、将来の目標の形成・発達にも関与することを予測させている。

よって、本研究では高校生の目的意識や希望職業の形成に、「意味ある他者」(足立, 1994)が深く関わっていると予測する。つまり、「意味ある他者」との関係を通して、高校生が将来の希望職業という目的意識を発達させると考える。また、「意味ある他者」との関係はそのような目的意識だけではなく、間接的に進路意識全般の発達をも促進していることが考えられる。進路意識の発達の1指標として、進路・学習達成に対する興味・関心の高さが指摘できるが、そのような興味・関心がどのような対人的プロセスを通して形成されるかに関する知見は少ない。そこで、意味ある他者との関係を通して、「①進路・学習達成への他者からの評価、続いて②進路・学習達成への自己感情、その結果としての③進路・学習に対する興味・関心」という文脈を設定し、それを進路意識尺度として設定した。

以上の経緯から、本研究では「意味ある他者尺度」と「進路・学習意識尺度」を構成し、その上で「意味ある他者」のあり方が、「進路・学習意識」(進路・学習への興味・関心の内面化)と職業選択をどのように規定するかについて、意志型

*学校心理学教室

と願望型の高校生を比較しながら検討する。

〈方法〉

1) 調査対象者

本研究の調査対象者は、沖縄県の普通高校の各学年の生徒である。その性別内訳を表1に、学年別内訳を表2に示した。特に性別、学年別の対象者の片寄りはないが、地域別では中部地区が圧倒的に多く、次いで那覇地区が多い。反対に北部、宮古、八重山では調査対象者が少ない。この片影りは基本的には各地区の学校数の差に由来しており、標本抽出として特に問題があるとは言えない。

表1 性別調査対象者

性別	人数
男子	1364 (45.7%)
女子	1623 (54.3%)
計	2987 (100.0%)

表2 学年別調査対象者

学年別	人数
1年	1037 (34.5%)
2年	984 (33.0%)
3年	989 (32.9%)
計	3010 (100.0%)

2) 調査尺度

①「将来就きたい職業」の選択の理由として、18個の労働価値（藤本，1982）がどの程度あてはまるかを評定させた。労働価値観とは、A：仕事の外面性—安定性，収入，社会的評価，働く時間，働く環境，上役，B：仕事のやり方—奉仕的

活動，美的活動，創造的活動，研究的活動，協同的活動，管理的活動，C：仕事の性質—多様性，自律性，達成感，能力の発揮，性格の活用，道義性の18の理由がある。

②「意味ある他者」の測定：意味ある他者とは、子どもの社会化や成長・発達においてより重要な意味を担っている人（足立，1994）と定義される。具体的には、「将来のための参考になる話が聞ける。その人から注意・忠告されるとこたえる。その人の男（女）らしい振り舞いを見てそうなりたいたいと思う。その人の言うことは無条件に従える。悩みなどを相談できる。その人といっしょにいると安心できる。」と言うことであり、ここでは親、教師、友人の3者の意味ある他者となっている程度を測定する質問紙を作成した。そして、意味ある他者の存在の有無は社会的情報や進路に関するさまざまな知見の獲得と、他者の立場に立って自己のあり方や行動を監視できるという利点を有している。そういう点で「将来の職業選択」「労働価値観」「一般的進路意識」のあり方に深く関係するものと考えられる。

③「一般的進路意識尺度」：現在の学業達成への関心・内面化・社会的承認，高校生の将来の職業選択や職業観の形成に関する職業的進路発達や，学業，進学を中心とした教育的進路発達が「意味ある他者」の影響を受けて発達する（坂柳ら，1993）ということから，表3に示す「進路・学習意識尺度」として，現在の学業・将来の希望進路達成への社会的承認，現在の学業・将来の希望進路達成時の感情（うれしい，満足と答えるほど目的が内面化している），および現在の学業達成・

表3 一般的進路意識の構造

	関心度	内面化	社会的承認の認知
現在	学業達成への関心	学業達成時の感情 (うれしい)	学業達成時の他者からの承認 (喜んでくれる)
将来	進路達成への関心	進路達成時の感情 (満足)	進路達成時の社会的承認 (まわり・社会から認められる)

将来の希望進路達成への関心に関する計30項目を作成した。

上記の各調査尺度に、家庭学習時間、進学希望水準、学業成績の自己評価の項目を加え「沖縄県の高校生の将来の目的意識と進路意識に関する調査票」を作成し、各地域の調査校に依頼し、担任教諭の指導のもと調査を実施した。

<結果と考察>

1) 「意味ある他者」尺度の因子分析

最初に、意味ある他者尺度の因子分析を行い、尺度の因子構造を確認する。表4は「意味ある他者」尺度の因子分析の結果を示している。初期解で固有値が1を越えた3因子をバリマックス回転した。またその時、共通性の低い項目(0.200以下)は2回目の分析で除外した。その結果全分散の42.12%が説明されている。

第1因子は、項目4「たいがいのことなら素直に忠告を聞ける親友がわたしにはいる」、項目8「よく友達と世の中のことや将来のことをいろいろと話し合っている」、項目15「将来の進学や職業のことについていろいろ話し合える友人がいる」、項目16「友人の深い考えや視野の広さに感動することがよくある」、項目17「友人は、困ったことを相談に乗ってくれ、いいアドバイスをしてくれる」というほとんど友人関係の項目が集まる「意味ある他者(友人)」の因子であることが分かる。

第2因子は、項目5「先生は世の中のいろいろな出来事や人々の考え方を話してくれる」、項目9「私はよく、先生にいろいろな悩み事や困ったことを相談している」、項目12「先生の男らしい(女らしい)振る舞いや行動を見て、自分もそうなりたいと思うことがある」、項目13「先生の言うことなら、たいがいのことは素直に聞ける」、項目14「先生から勉強のためになる話をいろいろ聞くことができる」という項目が集まる「意味ある他者(教師)」の因子であることが分かる。

第3因子は、項目1「お父さん(お母さん)から、自分の将来のためになるいろいろな話が聞ける」、項目3「お父さん(お母さん)の男らしい(女らしい)振る舞いや行動を見て自分もそうな

表4 意味ある他者尺度の因子分析

項目	因子1	因子2	因子3	h ²
1			.734	.745
3			.669	.505
4	.685			.510
5		.678		.503
6			.549	.393
7			.647	.483
8	.728			.578
9		.559		.352
10			.700	.556
12		.699		.514
13		.689		.488
14		.725		.565
15	.832			.717
16	.740			.585
17	.844			.743
固有値	3.210	2.683	2.465	8.358
%	16.2	13.5	12.4	42.12

りたいたいと思うことがある」、項目6「お父さん(お母さん)の言うことならたいがいのことなら素直に聞ける」、項目7「お父さん(お母さん)に私はよく悩みを相談する」、項目10「お父さん(お母さん)は世の中で何が大事なことか話してくれる」という項目が集まる「意味ある他者(親)」の因子であることが分かる。

意味ある他者は「話の内容・領域」に関しては分化しておらず、相手によって分離する形になっている。友人、教師、親に関しての「注意されたり、叱責されたりするとこたえる」という項目は、それぞれの因子には含まれず、感情的にポジティブな項目が「意味ある他者」の特徴となっており、「清濁併せ飲む」というダイナミックな人間関係を捉える形になっていない。すなわち、それほど深い連帯感にはなっていないと予想される。

2) 「意味ある他者」の性差と学年差

ここで、意味ある他者の性差と学年差について検討しておく。表5は意味ある他者(友人)、意味ある他者(教師)、意味ある他者(親)の性と学年の2元配置の分散分析の結果を示している。

その結果、意味ある他者（友人）、意味ある他者（教師）、意味ある他者（親）には性差が認められ、いずれも女子の得点の高いことが分かる。対人関係の中で行動・努力目標を期待される女子において、それに関係する意味ある他者という心理学的特性が発達していると言える。意味ある他者（友人）、意味ある他者（教師）には学年差が認められ、意味ある他者（友人）は学年とともに発達していることが分かる。意味ある他者（教師）は1年生より2年、3年生で高くなっている。しかし、意味ある他者（親）は学年差は見られていない。高校に入学して、友人や教師との関係性は学習活動やクラブ活動、および進路指導を通して発達していくが、親との人間関係は固定的であり、その背景には学年とともに、学習や進路に関する会話・対話もそれほど進展しないことが予測される。

3) 進路・学習意識の因子分析と性差・学年差

(1) 進路・学習意識の因子分析

表6は、進路・学習目標の内面化の程度を検討するために作成した「進路意識尺度」の因子分析の結果を示している。固有値1以上の6因子をバリマックス回転して単純構造を求めた。6因子で全分散の51.55%が説明されている。

第1因子は、項目5「私は今、自分の将来のことを全く気にしていない」に負の負荷が、項目8「将来困ったときでもあきらめず努力できる人間になりたい」、項目19「将来自分の仕事で努力することができれば充実した人生が送れると思う」、

項目20「自分の力を十分に発揮できる能力の高い人に将来是非なりたい」、項目24「将来能力を高め、それを仕事で発揮できればこんなすばらしいことはない」、項目25「希望通りの進学ができればきっと大きな自信につながると思う」、項目26「将来希望通りの職業に就ければ一生懸命頑張ると思う」という項目に正の負荷が得られた因子である。ほとんど進路への関心と、進路達成時の予期感情が一つになる、自分の将来の考え、ポジティブに捉えて、なりたい自分、自分がどのように仕事をするか考えている「個人的将来目標」の因子と見ることが出来る。そしてもっとも進路目標が内面化された形になっているものと考えられる。

第2因子は、項目16「将来社会的に活躍できればみんなに信頼され楽しい生活ができると思う」、項目21「希望通りの職業に就けば周りの人は一人前と認めてくれると思う」、項目23「人々から信頼され社会的に活躍できる人になることにあるがられている」、項目27「将来能力の高い人間になることを両親も強く望んでいると思う」、項目28「将来あきらめず努力できる人間になれたら周りの人々は高い評価をしてくれるだろう」、項目29「希望通りの進学ができれば、両親はきっと満足し喜んでくれると思う」、項目30「将来活躍できる人間に成長すれば、必ず周りの人から尊敬されるだろう」という項目が一つにまとまっている。主に進路達成時の対人的・社会的評価の予想を表す内容である。それ故内面化という視点からすると自己の感情や関心は弱いと考えられる。この因

表5 意味ある他者尺度の性差と学年差

	学年F値	性F値	男子	女子	1年生	2年生	3年生
意味ある他者(友人)	70.96***	381.1**	12.4 b	14.9 a	13.0 c	13.5 b	14.9 a
意味ある他者(教師)	6.17***	31.64***	9.6 b	10.2 a	9.7 b	10.0 a	10.2 a
意味ある他者(親)	0.09	44.25***	10.2 b	11.1 a	10.7	10.6	10.6

*p<.05 **p<.01 ***p<.001 英字の違いは平均の有意差を示す。

表6 進路・学習意識の因子分析

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	h ²
1			.644				.531
2				.414			.419
3					.562		.490
4						-.545	.514
5	-.40					.563	.536
6			.413				.440
7			.682				.545
8	.566						.445
9			.630				.546
10			.400		.458		.413
11			.661				.583
12						.689	.497
13				-.766			.598
14				.703			.597
15							.551
16		.660					.517
17				.685			.621
18					.536		.443
19	.633						.535
20	.617						.465
21		.624					.441
22	.667						.486
23		.600					.560
24	.717						.558
25	.590						.507
26	.640						.480
27		.563					.452
28		.567		.413			.500
29		.443					.512
30		.772					.640
固有値	3.648	3.191	3.006	2.335	1.699	1.583	15.415
%	12.32	10.67	8.10	7.80	5.68	5.29	51.55

子を「社会的評価目標」と名づけた。Dweck (1988) の指摘した「評価目標」に関係している内容である。

以上の2つの因子は高校生の将来目標が、自分になりたい・やってみたいという主体的・能動的な目標と周りの人から認められたい・評価されたいという受動的な目標に分かれることを示唆している。

第3因子は、項目1「私はテストでいい点が取れるかどうか気になる」、項目6「希望通りの進学ができるかどうか気になる」、項目7「今、テストでいい点が取れたらとてもうれしく思う」、項目9「勉強でもっとがんばれたらとても満足できると思う」、項目10「将来の進路がはっきりすれば勉強にもっとファイトがわくと思う」、項目11「思うように成績が上がればうれしくてもっとやる気になるだろう」という項目がまとまっている因子である。進路・学業達成時の予期感情と学業への関心が中心となっている。しかし進路・学業達成時の予期感情は現実への補償である可能性と学業達成への不安に関係していると思われることから、第3因子を「進路・成績への不安」と名づけた。主に予期感情の項目が多いことから、学習目標の内面化の程度は若干弱いと思われる。

第4因子は、項目13「私がテストでいい点を取ったとしても、両親や先生は特に誉めてくれないと思う」という項目に負の負荷が見られ、項目14「私が勉強で頑張ったら両親や先生はそれをちゃんと評価してくれる」、項目17「将来あきらめず努力できる人間になれば周りの人はきっと高い評価をしてくれるだろう」という項目に正の負荷が見られる因子である。主に成績に対する他者の評価に関係していることから「評価的学習目標」の因子と名づけることができる。

第5因子は、項目3「私が授業を熱心に聞けば、先生は私の頑張りを認めてくれると思う」、項目10「思うように成績が上がればうれしくてもっとやる気になるだろう」、項目18「授業を熱心に聞けば、もっと勉強がおもしろくなっていくだろう」という3項目がひとつになっている。第4因子とは異なり、主に頑張りへの評価や学習への自己感情に言及していることから「学業への関心」を表す因子と考えられる。

最後の第6因子は、項目4「私は今勉強で頑張ることを心がけている」とい項目に負の負荷が、項目5「私は今将来の進路のことを全然気にしていない」、項目12「私は、現在授業を熱心に聞くことに注意を払っていない」という項目に正の負荷が見られる因子である。明らかに「進路・学業への無関心」の因子であると考えられる。

以上に検討してきたように進路・学習目標の内面化の程度に関する進路意識尺度は、高校生が将来目標として、内面化の高い「個人的将来目標」と内面化の低い「社会的評価目標」を持つこと、そして学習目標に関しても内面化の高い「学習への関心」から「評価的学習目標」「学業への不安」「進路・学習への無関心」に分かれた。しかし「学習への関心」の因子は学習に関する自己感情の項目が集まっており、内面化の高い「学習への関心」になっているかどうか疑わしいと思われる。

(2) 進路・学習意識の性差と学年差

表7は、進路・学習意識の各因子の性差、学年差の2元配置の分散分析の結果を示している。その結果、「社会的評価目標」を除くすべての因子で性差の主効果が有意になっている。下位検定の結果、「個人的将来目標」「進路・成績への不安」「評価的学習目標」「学習への関心」において男子より女子の得点の高いことが分かる。「進路・学習への無関心」では反対に女子より男子の得点が高かった。このような結果から、女子は「個人的将来目標」の発達が高く、「学習への関心」も高くなっているが、「評価的学習目標」も高いことから「進路・成績への不安」も高くなっていることが示されている。ではこのような進路目標・学習に対する意識は、高校生活を通してどのように変化・発達して行くであろうか。表7の結果から、「進路・成績への不安」を除くすべての因子において、学年の主効果が有意になっている。「個人的将来目標」は学年の進行とともに得点が増し、なりたいたい自分ややりたいことが明確化していく方向にある。しかし、「社会的評価目標」は2年生で低下する方向にあるが3年生でまた上昇している。周りからの進路達成に関する圧力が受験を前に高くなることが予想される。しかし、「評価的学習目標」と「学習への関心」は2年生

表7 進路・学業意識の各因子の性差と学年差

	学年F値	性F値	男子	女子	1年生	2年生	3年生
1 個人的将来目標	25.48***	35.24***	27.0	27.8	26.8	27.5	27.9
			b	a	c	b	a
2 社会的評価目標	2.39+	0.26	20.5	20.6	20.7	20.4	20.8
					ab	b	a
3 進路・成績への不安	1.81	65.71***	21.9	23.0	22.5	22.7	22.4
			b	a			
4 評価的学習目標	6.03**	75.54***	14.2	15.0	14.8	14.7	14.5
			b	a	a	a	b
5 学習への関心	11.40***	46.91***	8.5	9.0	8.9	8.9	8.6
			b	a	a	a	b
6 進路・学習への無関心	5.45****	48.43***	6.6	6.2	6.6	6.4	6.0
			a	b	a	b	c

*p<.05 **p<.01 ***p<.001 英字の違いは平均の有意差を示す。

から3年生にかけて得点が低下している。そして「進路・学習への無関心」も学年とともに得点が確実に低下している。また「進路・成績への不安」が学年の進行とともに変化しないことから、進学に向けての学習が思うほどはかどらず、意識のレベルでは学習に関心を高めていくが、学習行動を実行できずその結果として進路・学習への不安を抱き続けている姿が想像できる。

(3) 意味ある他者、進路・学習意識との関係

各意味ある他者の得点が進路・学習に関する意識をどのように規定しているかを探るために、両者の相関係数を算出した。表8にその結果を示す。その結果、意味ある他者（友人）、意味ある他者（教師）、意味ある他者（親）も進路・学習意識の各因子と同程度の正の相関を示している。あえて違いを強調すると、友人よりは教師、親の意味ある他者の程度が進路・学習意識とより高い正の相関を示している。特に「評価的学習目標」では教師、親の意味ある他者の影響が高いと言える。

3) 労働価値観と意味ある他者、進路意識の関係 前項で検討したように、高校生の将来の希望職

業は労働価値観のあり方に大きく規定されていた。では、このような労働価値観は意味ある他者とのような関係にあり、そして進路・学習に関する意識をどのように規定しているのだろうか。

表9は、高校生の労働価値観と3者の意味ある他者との相関係数と、進路・学習に関する6因子との相関係数を示したものである。まず、「仕事の外面性」の得点は、意味ある他者（友人、教師、親）と無相関である。ということは、「意味ある他者」を形成できないとき、高校生は「仕事の外面性」を重視する労働価値観を形成することになる。このような形の学習を、東（1993）は、「滲み込み型学習」として説明している。ここでは親や教師の「教え込み型学習」に依拠せず、子どもが模倣および環境の持つ教育作用に依存する学習を通して考え方や行動規範を身につけることになる。

注目すべき結果は、「仕事のやり方」を重視する労働価値観が3者の意味ある他者と正の相関を示すことである。また「仕事の性質」という労働価値観も意味ある他者（友人）、意味ある他者（親）と正の相関を示している。

次に、労働価値観と進路・学習意識との関係に

表8 意味ある他者と進路・学習意識の相関

進路・学習意識	意味ある他者（友人）	意味ある他者（教師）	意味ある他者（親）
個人的将来目標	.362	.271	.252
社会的評価目標	.238	.292	.252
進路・成績への不安	.228	.271	.262
評価的学習目標	.238	.369	.424
学習への関心	.222	.353	.273
進路・学習への無関心	-.212	-.260	-.212

ついて検討する。その結果、「仕事の外面性」は「社会的評価目標」「進路・成績への不安」「学習への関心」と正の相関を示している。つまり、仕事の外面性を重視する労働価値観は、「社会的評価目標」を形成させ、「学習の関心」を高めるが、「個人的将来目標」を形成できず「進路・成績への不安」を高めるパターンになっていることがうかがえる。「仕事のやり方」は「個人的将来目標」、「学習への関心」「社会的評価目標」と正の相関を示し、「仕事のやり方」を重視する労働価値観が「個人的将来目標」を高め、かつ「学習への関心」を高める作用を持つことを示しているが、同時に「社会的評価目標」をも高めていることから、「学習への関心」の内面化の程度は思うほど強い動機づけを持ち得ない可能性を示唆している。また、「仕事の性質」は「個人的将来目標」のみと正の相関を示した。

以上の結果から、高校生では意味ある他者が存在しないとき、仕事の外面性を重視する安易な労働価値観が育ち、「社会的評価目標」のみが発達し、それ故学習への関心と学習行動が不安定になっていくこと、そして仕事のやり方を重視する労働価値観の発達は、確かに意味ある他者との関係から発達していき、「個人的将来目標」を形成して

いくが、同時に「社会的評価目標」をも形成させ、同じく学習への関心と学習行動がうまく組織しえない可能性を伺わせている。そのような結果から、沖縄県の高校生では「目的を持ち努力していく意志型」が少なく、「目的を持ちながらも努力しない願望型」の多いことが分かる。

4) 職業選択と意味ある他者、進路・学習意識の関係

高校生の労働価値観の仕事のやり方、仕事の性質は明らかに意味ある他者の影響を受けていた。ここで、高校生の選択された職業を8つの領域に分け、8つの職業群によって意味ある他者の程度の差があるかどうか、そして、同じく8つの職業群に進路・学習意識の6つの因子にどのような差があるかについて検討する。

表10は、8つの職業群の各意味ある他者の得点の差について一元配置の分散分析の結果を示している。その結果、意味ある他者（友人）の程度は8つの職業群において差のないことが分かる。つまり、意味ある他者（友人）は職業選択に力を発揮していないと言える。しかし、意味ある他者（教師）、意味ある他者（親）の得点は、F値が有意になり職業群の違いによって得点の差のあるこ

表9 労働価値観と意味ある他者、進路・学習意識の関係

	仕事の外面性	仕事のやり方	仕事の性質
意味ある他者（友人）		.212	.234
意味ある他者（教師）		.201	
意味ある他者（親）		.274	.433
個人的将来目標		.274	.272
社会的評価目標	.352	.336	
進路・成績への不安	.281		
評価的学習目標			
学習への関心	.373	.205	
進路・学習への無関心			

とを示している。下位検定の結果、意味ある他者（教師）の得点は、職業群7「一般的・対人的職業」、職業群5「エリート・華やかな職業」、職業群6「子どものあこがれの職業」を選択した高校生に高く、職業群1「知的オフィスワーク」、職業群2「なりにくい・人気のない職業」、職業群3「ハードな職業」、職業群8「一般的・庶民的職業」を選択した高校生の得点の低いことが分かる。意味ある他者（親）の得点もF値が有意になり、下位検定の結果、職業群5「エリート・華やかな職業」、職業群6「子どものあこがれの職業」、職業群7「一般的・対人的職業」、職業群1「知的オフィスワーク」、職業群4「マスコミ報道関係の職業」を選択した高校生に高く、職業群2「なりにくい・人気のない職業」、職業群3「ハードな職業」、職業群8「一般的・庶民的職業」を選択した高校生の得点が低くなっている。明らか

に、意味ある他者（教師）、意味ある他者（親）の程度は、高校生の希望職業を方向づけていることが分かる。

では、次に進路・学習意識の各因子の得点が高校生の職業選択とどのように関係しているかについて検討する。表11は、進路・学習意識尺度の各因子の得点について職業選択を要因とする一元配置の分散分析の結果を示している。各因子のF値はすべて有意である。下位検定の結果、各因子の得点の高低で職業群を整理すると以下のような（図1）。

まず2つの進路目標の高低に注目して各職業群の特徴を探っていく。「個人的将来目標」のみの高い職業は、職業群2「なりにくい・人気のない職業」と職業群4「マスコミ報道関係の職業」だけである。これら両者は、「進路・成績への不安」が低い、しかし「学習への関心」も低くなって

表 10 職業選択と意味ある他者の関係

	職業F値	1	2	3	4	5	6	7	8 注)
味ある他者 (友人)	1.58	13.1	13.4	12.7	14.1	13.6	14.6	13.9	13.8
味ある他者 (教師)	6.14***	9.8 bc	9.5 c	9.3 c	9.6 bc	10.1 ab	10.1 ab	10.5 a	9.5 c
味ある他者 (親)	5.14**	10.7 ab	10.2 bc	9.8 c	10.5 ab	11.0 a	11.0 a	11.0 a	10.1 bc

*p<.05 **p<.01 ***p<.001 英字の違いは平均の有意差を示す

注) 分類は人気度の評定に基づくクラスター (島袋, 1996)

- 職業群 1 = 「知的オフィスワーク」: 設計・技術者 司法書士・税理士 国家公務員
 2 = 「なりにくい・人気のない職業」: 研究者 大工・職人 運転手
 3 = 「ハードな職業」: コンピューター関係 農漁業 不動産関係
 4 = 「マスコミ・報道の職業」: 芸術家 歌手・役者・タレント 新聞記者・レポーター
 5 = 「エリート・華やかな職業」: パイロット・スチュワーデス 旅行業 弁護士・医者・裁判官
 6 = 「子どものあこがれの職業」: 保育士・幼稚園教諭 スポーツ選手
 7 = 「一般的・対人的職業」: 会社員 看護師 小中高の教諭 警察官・消防士
 8 = 「一般的・庶民的職業」: 店員・販売員 調・理・美容師 地方公務員

表 11 職業選択と進路・学習意識の関係

	職業F値	1	2	3	4	5	6	7	8 *
個人的将来目標	5.75**	27.5 ab	27.9 ab	26.6 c	27.8 ab	28.1 a	27.2 bc	27.4 ab	26.8 c
社会的評価目標	5.84**	20.9 a	19.6 c	19.6 c	20.1 bc	21.0 a	21.1 a	20.9 a	20.6 ab
進路・成績への不安	11.85***	3.0 a	21.0 c	21.7 bc	21.3 c	23.1 a	23.2 a	23.0 a	22.2 b
評価的学習目標	8.01***	4.6 bc	13.9 d	13.8 d	14.2 cd	14.8 ab	15.2 a	14.9 ab	14.6 bc
学習への関心	2.94*	8.8 ab	8.5 b	8.5 b	8.6 b	9.0 a	9.1 a	8.8 ab	8.7 ab
進路・学習への無関心	7.12***	6.2 bc	6.3 bc	6.7 a	6.6 a	6.0 c	6.4 ab	6.2 bc	6.7 a

*p<.05 **p<.01 ***p<.001 *職業群, 表 10 注) 参照, 英字の違いは平均の有意差を示す

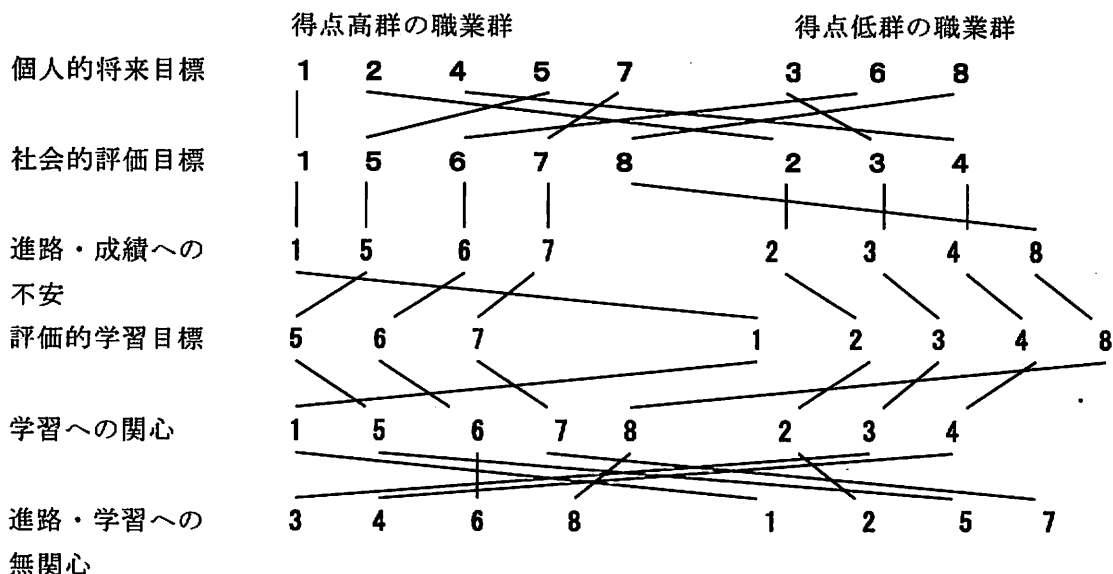


図1 進路・学習意識の得点と職業選択（職業群）の関係

いる。つぎに「個人的将来目標」も「社会的評価目標」の両方の得点の高いのが、職業群1「知的オフィス・ワーク」、職業群5「エリート・華やかな職業」、職業群7「一般的・対人的職業」である。つまり進路目標に迷いのある高校生である。その結果、3群とも「進路・成績への不安」が高くなり、学習への関心を高めていることが分かる。「社会的評価目標」のみが高いのが、職業群6「子どものあこがれの職業」と職業群8「一般的・庶民的職業」である。前者は「進路・成績への不安」も「評価的学習目標」も「学習への関心」も高くなっているが、後者は「進路・成績への不安」も「評価的学習目標」は低い「学習への関心」は高くなっていることが分かる。個人的将来目標も社会的評価目標も低いのが、職業群3「ハードな職業」である。このグループは「進路・成績への不安」「評価的学習目標」「学習への関心」も弱いという特徴を示している。

以上の結果から、高校生の職業選択は、ある程度2つのタイプの進路目標と、さらにそれらが学習に関する関心と絡み合い、方向づけられていることが分かる。

5) 意味ある他者の程度の性差と「意志型」と「願望型」の差異

前項で検討してきたように、進学に関する「願望型」と「意志型」には学習場面だけでなく、将来の職業選択の内容や、それを選択する際の職業意識（労働価値観）に大きな相違のあることが分かった。

次に、社会の中にあるさまざまな職業に関する知識や職業意識としての労働価値観のあり方は、基本的には「親や教師そして友人」（社会化のエージェント）を介して学習されていくと考えられる。ここではそのような社会化のエージェントが、高校生の内面の世界で「意味ある他者」となって、彼らの進路意識や職業意識、将来の職業選択にどの程度方向性を与えているかについて検討する。

表12は親、教師、友人が「意味ある他者」となっている程度の得点を学年別、準願望型（ここでは進路目標が中程度で家庭学習習慣の弱い高校生を分析に加えた）、願望型と意志型に分けて比較したものである。その結果、親、教師、友人が「意味ある他者」となっている程度には学年差と準願望型、願望型と意志型の間でF値がすべて有意になり平均値に差が見られることが分かる。すなわち、明らかに学年の進行とともに教師、友人の「意味ある他者」の得点が高くなることが分かる。先にも考察したように、学校生活を通して友人や教師との関係が深化していくものと考えられ

る。しかし、親の「意味ある他者」の程度は学年の進行に関係なく一定である。高校入学以前から「親子関係」が成立していることと、高校生活を通して親子関係は変化しにくいことを示している。

また、準願望型、願望型の高校生に比較して意志型の高校生にも同じことが言える。つまり、目的を持ち学習行動の役割を理解して実行している高校生は、自己の将来に関する目標や進路意識や職業意識のあり方を、「親、教師、友人」との関係の中で発達させ、それに必要な行動を自己コントロールしていることを示している。そして、願望型と準願望型の高校生は、親や教師の意味ある他者の得点が意志型に比較して弱い。高校生を「準願望型、願望型」から「意志型」に発達させるためには、高校生の対人関係のあり方の指導と進路達成の現実の情報を提供していくことが必要になっていくと言えよう。具体的には日常生活における「親一子」「教師一生徒」「生徒同士」間の会話・対話のあり方を重視する進路指導の工夫・改善が望まれる。ちなみに、清水・坂柳（1988）は、高校生の進路決断と進路成熟度態度が父、母および友人との進路の会話の有無によって異なることを報告している。

6) 進路・学習意識の「意志型」と「意志型」の差異

先に「意志型」の高校生は意味ある他者からの影響を受けながら、職業的発達（将来の職業の選

択、労働価値観）を達成していくことが指摘された。それでは、「個人的将来目標」「社会的評価目標」という2つの目標と、「進路・成績に関する不安」「評価的学習目標」「学習への関心」「進路・学習への無関心」という主に学習に関する意識のあり方は、準願望型、願望型および意志型の高校生においてどのような違いを示すのであろうか。

一般的な進路・学習意識（現在の学習達成や将来の進路達成）に関する関心度、その内面化の程度（達成したときのうれしさの感情）、そして達成時の社会的承認の認知（他者に誉められ、承認される程度）にはどのような願望型と意志型の相違が見られるであろうか。

表13は進路・学習意識の各因子の得点の学年差、準願望型、願望型と意志型の差を示したものである。まず、現在の学業達成へ関心・内面化・対人的承認の認知から比較検討する。表13の結果から、いずれの因子もF値が有意あるいは有意な傾向が認められ、進路・学習意識の程度には性差が認められる。

次に、準願望型、願望型と意志型の比較を行う。表13の結果から、現在の学業への関心・内面化・対人的承認の認知のいずれも意志型の高校生の得点が高いことが分かる。つまり、大学進学という目的を持ち少なからず勉強をしている意志型の高校生は、学業達成時には対人的承認を受け、それを受けて自分も喜びを感じ、そしてますます学業への関心が高くなっていることをうかがわせてい

表 12 意味ある他者（親・教師・友人）の学年・進学目的タイプの差

要因 / 検定	F 検 定		下 位 検 定 *					
	学年 F 値	目的 F 値	1 年	2 年	3 年	準願望型	願望型	意志型
意味ある他者 (友人)	38.92***	8.92***	13.0 c	13.4 b	14.8 a	13.8 b	13.1 c	14.3 a
意味ある他者 (教師)	4.27*	50.03***	9.7 b	10.0 a	10.1 a	9.3 c	9.8 b	10.6 a
意味ある他者 (親)	38.92***	8.92***	10.6	10.6	10.5	10.2 c	10.6 b	11.2 a

*p<.05 **p<.01 ***p<.001 * 英字の違いは平均の有意差を示す

る。そして、同時に将来の進路達成時の感情（うれしさ、喜び）を心に思い浮かべることができ、将来の進路達成への関心も高くなっている。

7) 要約と考察

①「願望型」に比較して目標志向性のある「意志型」の高校生は、親、教師、友人を「意味ある他者」として心の中に内面化し、そのような他者の意見や情報を参考にして、将来の職業や労働価値観を形成し、希望職業を形成している。

②「願望型」に比較して「意志型」の高校生は、自己の学習の達成や希望進路の達成に「他者から承認」を受けると認知している。それを受けて「学習目的」「進路目標」を深く内面化し、現在の学習達成と将来の希望進路達成への関心が高くなっていることが本節の結果から推測される。

以上の諸結果から、高校生の健全な目的意識を高揚し、その達成に必要な行動力、すなわち目標志向性を育成して行くために親、教師、友人との間における「将来」に関する会話が重要になると考えられる。親、教師、友人との会話、意見の交換、および議論を通して、高校生は社会のあり方や職業を広く正しく理解し、適切な労働価値観を

発達させていくものと考えられ、社会的に妥当な形で目的意識を形成する事が、自分の行動やあり方を「振り返る」視点を獲得し、目的達成に向けた自己形成が可能になっていくと言えよう。「意志型」の高校生とは真にそのような過程を経て成長・発達してくると考えられる。中川（1982）は、子どもの目的意識を育てる条件として、①親子間における「子どもの将来に関する会話」の成立と、②子どもが他者の言動に感動すること、の重要性を指摘しているが、それは親子間だけに限らないと言える。教師一生徒間、友人同士でも同じことが言える。このようなことから、意志型の子どもとは、自分の目標と行動の「手段-目的関係」を理解し、行動を実行に移すことの出来る子どもである。しかし、それが可能となるためには、進路場面や学習場面において、意味ある他者との進路指導や学習指導による方向づけと、同時にその過程を支援していく対人関係が重要な要因となることを本節は示唆している。つまり、目標志向性すなわち「意志型」とは、進路自己効力や結果期待だけではなく、それら2つの要因を意味ある他者との2人三脚で発達させている子どもであると言える。

表13 進路・学習意識の学年・進学目的タイプの差

要因/検定	F 検 定		下 位 検 定					
	学年 F 値	目的 F 値	1 年	2 年	3 年	準願望型	願望型	意志型
個人的将来目標	19.69***	45.16***	26.8 c	27.4 b	27.9 a	26.7 c	27.2 b	28.2 a
社会的評価目標	2.25	2.83+	20.6	20.3	20.7	20.6 ab	20.3 b	20.7 a
進路・成績への不安	4.86***	65.59***	22.4 ab	22.7 a	22.3 b	21.5 c	22.6 b	23.4 a
評価的学習目標	8.32***	18.62***	14.8 a	14.6 ab	14.4 b	14.3 c	14.6 b	15.0 a
学習への関心	13.48***	1.95***	8.8 a	8.9 a	8.5 b	8.5 b	8.8 a	8.9 a
進路・学習への無関心	19.80***	162.04***	6.7 a	6.4 b	6.1 c	6.9 a	6.7 b	5.6 c

*p<.05 **p<.01 ***p<.001 注) 英字の違いは平均の有意差を示す

<引用文献>

- 東洋 1994 日本人のしつけと教育 東京大学出版会
- 東江平之ほか 1991 沖縄における社会的・教育的適応行動に関する研究 平成元年度特定研究紀要 琉球大学法文学部
- 足立喜実子 1994 青年における意味ある他者の研究 青年心理学研究 6,19-28.
- 藤本喜八 1982 「職業（労働）価値観の測定について（その2）」進路指導研究, 3, 10-1 7.
- 廣瀬 等・島袋恒男ら 1996 沖縄県の児童・生徒の学習統制感と原因帰属に関する発達的研究（Ⅱ）琉球大学教育学部紀要 48, 405-416.
- 沖縄県教育委員会 1994 高等学校における進路指導の基本的指針と具体的取り組み
- 中川作一 1982 子どもの目的意識を育てる条件 未来をひらく教育, 80,27-45.
- 坂柳恒夫 1993 高校生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 17,127-136.
- 島袋恒男ほか 1995 沖縄県の児童の進路発達と原因帰属に関する研究-CAMIによる学習意欲と進路発達の関係一 琉球大学教育学部紀要, 46, 115-121.
- 島袋恒男ほか 1996 沖縄県の児童・生徒の学習統制感と原因帰属に関する発達的研究（Ⅰ）琉球大学教育学部紀要, 48,387-404.
- 清水和秋・坂柳恒夫 1988 進路不決断と進路成熟一父親,母親,友人,教師の影響に関する高校生 of 横断的研究 進路指導研究, 9,28-36.